

高年者における生活様式の調査研究

—— 余暇の過ごし方の一側面を通して ——

加藤 恵子

A Study on life style of Aged People

— Through One Profile of the Way to Spend Spare Times —

Keiko KATOU

Abstract

This study was conducted to grasp a profile of life style of aged people through the actual situation and their concept associated with time, economy and their family structure.

The survey was conducted on two group, ① to enterprises mainly with public bath service, ② to healthy people who are over 60 years old. A group of 545 people consisting mainly grand fathers and grand mothers of women's university students, and B group of 90 students of public school.

Summary of the survey came out as follows: 1) Across the country, there are 47.8% of public baths which open 24 hours. Others open between 9 AM and 11:30 AM and re-open in the afternoon from around 5 PM until 0:30 AM next morning. 2) Among those facilities which open 24 hours, service fees are Max. 2,200 yen, Min. 1,200 yen and most numbered was 1,800 yen, while average service charge is 1,789 yen. 3) while 91% of the respondent knew the existence of Kenko Centers, there were just about one half who have experienced taking bath in these facilities. Main purposes to visit the facilities were, to utilize hot spring, to take good relaxation and to take foods, and people who like to take bath are visiting there more often. 4) when people wish to stay at Kenko Centers for one month, at least 100,000 Yen will be needed with bath service charge, midnight charge, foods and other side dishes, clothing expenses, sanitation expenses and so on.

緒 言

1990年の平均寿命は男性75.5歳、女性81.3歳で世界の長寿国となった。一生に働く時間は8万4000時間で生涯の労働時間割合は12%という試算が経済企画庁でされている今日、自由時間をどのように生かすか、効果的に使うかが問われている。

余暇時間の内容も「休養」「交際」「レジャー活動」など活動の質は広範囲にわたり、なかでも休養・くつろぎ、スポーツ、趣味・娯楽に多くの時間が使われている。日本人の温泉好きと

入浴による身体の保健性が好まれ、サウナとヘルスセンターを一体にした型で風呂を数種類設け、何回でも入浴が自由で飲食やカラオケができ、休養室で仮眠ができ、深夜料金を払えば仮眠室で連泊も可能で、マッサージやイベントなど催事で一日遊べる施設、一般に健康センター・健康ランド等の呼称がある（以下健康センターと略す）が1984年12月愛知県に出現し、現在では全国に見られる。風呂を中心にした施設を利用しに、毎日通ってくる人、長期滞在する人などさまざまみられ、新しい余暇の過ごし方の一パターンでもある。本研究では、健康センターにおける実態と意識を時間の問題、経済面、家族関係などから、高齢者の一側面を把握することを目的として調査を行なった。

調 査 方 法

1：全国の風呂を中心にして営業を行なっている企業調査

調査年月日：1989年12月

調査対象および選出と方法

全国NTT職業別電話帳索引“サウナぶろ”より薬湯風呂、超音波泡風呂、白湯などの風呂を主体とした企業を対象とした。他に月刊レジャー産業資料とあわせ、電話での聞き取りおよび面接調査を実施

調査内容

営業時間、入湯料金、風呂の種類および数、服装、連泊の可否など調査、その結果136カ所調査可能であった。

2：実態調査—聞き取り及びアンケート調査

A：本学学生の祖父母	_____	493名	} 女性 330名 男性 215名
ゲートボール同好者	_____	52名	
健康センターでの聞き取り	_____		

調査内容

家族構成、年齢、平均年収、職業の有無、温泉に行った有無と数、健康センターについて知名度、入湯割合、入湯目的、入湯回数、宿泊の有無と期間、1日の支出額など調査。

有効回答率 91.6% 平均年齢71.5歳 調査年月日：1988年7月

健康で行動できる人を対象に資料を配布、一週間以内に回収した。以下Aと略す。

B：公立の生涯学習講座高年大学受講生 — 90名

有効回答率 100% 平均年齢68.4歳 調査年月日：1988年7月 以下Bと略す。

名古屋市内在住者で60歳以上を対象に2年間学んでいる、受講生に資料を配布、1週間後に回収した。

結果および考察

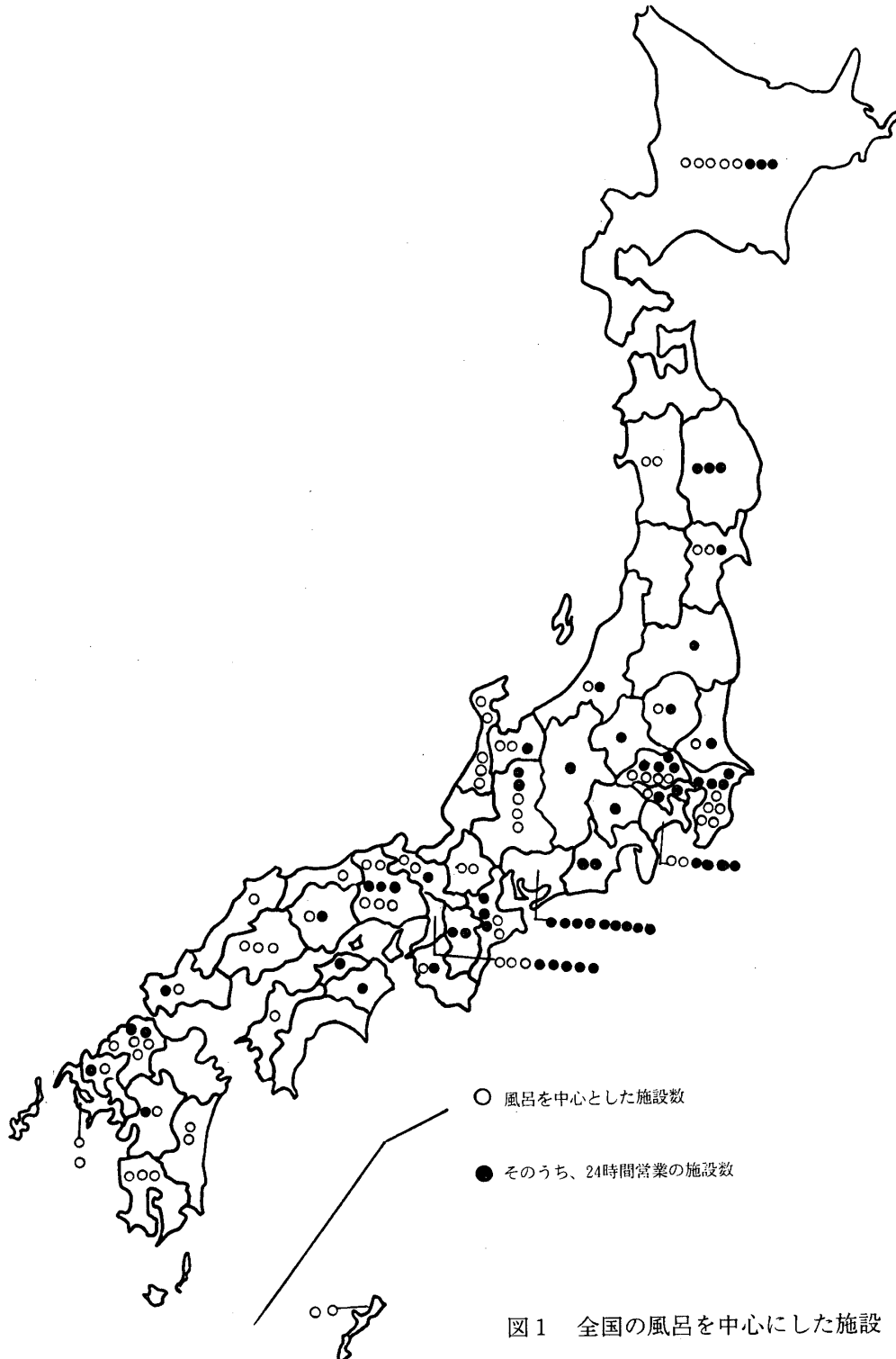
1：全国の風呂を中心にした企業調査

日本は世界でも有数の温泉国で平成元年3月現在温泉地が全国2,254カ所あり、全都道府県に存在し宿泊施設数は1万4,977カ所あり。古くから農繁期の体の疲れを癒したり、静養や病気の予防、健康増進などの目的であった。

現代では脳卒中後のマヒや成形外科領域のリハビリテーションの治療効果が認められ「温泉医学」の研究も進められている。平成2年度から厚生省が「温泉利用型健康増進施設」としてクアハウスの四地域（石川県、山形県、新潟県、長野県）を認定された。また家庭で有

名温泉の成分を調合した入浴剤を用い、温泉気分を味わえる商品もみられる。

数種類から十余数の浴槽を主体に設置し、その他仮眠室、マッサージ室、食堂など設けている施設を「風呂を中心にした施設」と定め、浴場経営は除き名称として健康センター、健康ランド、ゆうランド、ヘルスライフ、クアハウスなどの名称で経営している企業を調査した結果図1に示した。全国の136件のうち24時間営業が65件47.8%みられた。1990年に一部調査を行なったが建築中、計画中の施設が各地にあり、増加傾向がみられるが企業の中には



経営が困難で休業に至るところもみられる。愛知県内に24時間営業が9店あり、他地域とやや様相を異にしている。またごみ焼却の燃料を利用（浦和市、宿泊無し）して市立経営がされている。

24時間経営の「入湯料金」を図2に示した。最低で1,200円、最高で2,200円、最多は1,800円、平均1,798円である。地域により風呂の日は半額、ウィークデーの指定日には女性は半額、回数券の発行、日曜日に入湯した場合招待券の発行など各種考えられている。この料金の中には風呂上がりの着替え、タオル、バスタオル、ロッカーの鍵を入湯時に受取り、石鹸、シャンプー・リンス液、ドライヤー、化粧水、乳液、毛布など自由に使用でき、料金が高い程清潔感、奢侈の雰囲気が多くみられる。

地方自治体により深夜の規定は異なるが、午後12時過ぎ、午前2時過ぎなどに在館していると500円～1,000円の深夜料金を別途支払いが必要であり、「深夜料金」を図3に示した。最多は500円、次いで600円、両者で73.0%を占め、平均額は598円であった。

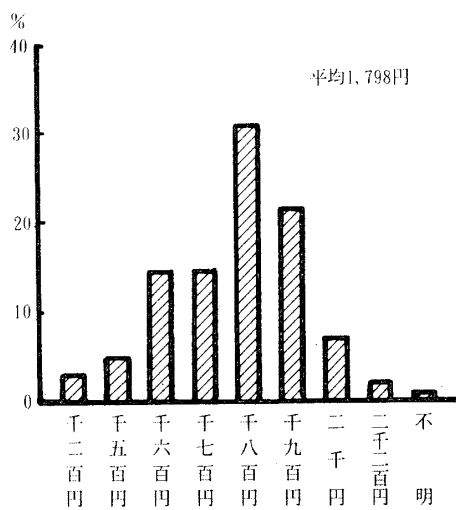


図2 入湯料金

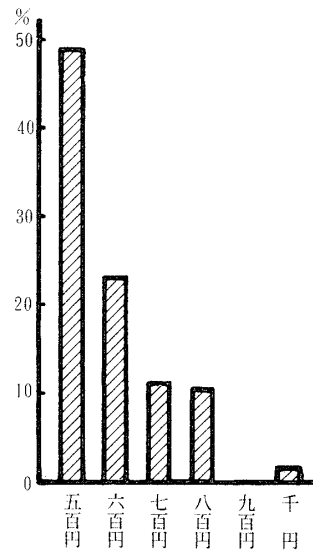


図3 深夜料金

健康センターの主営業種目は温泉である。「風呂の種類」を図4に示した。多い処で14種、少ない処では6～7種設置されており、漢方薬湯、超音波泡風呂、サウナ、シャワー（ボディプレッシャーを含む）、白湯（上がり湯を含む）などは何処にもあり、スペースが広く構えている企業は風呂の数も多く、しかも新しく出来る所ほどジェットバス、自足マッサージ風呂といったものが設置されている。他にマッサージ室があり、風呂上がりにマッサージを希望する場合は別途3,000円位追加すれば、体をほぐしてくれる。

大食堂には舞台がありカラオケができ、歌っている人を見ながら食事をして、深夜までカラ

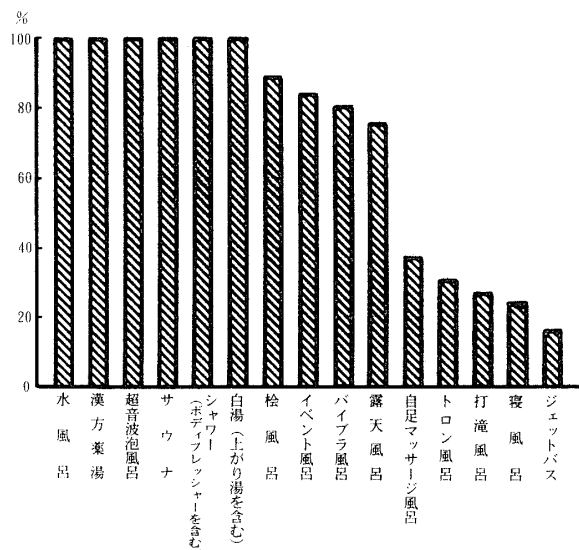


図4 風呂の種類

オケを楽しむ人達がみうけられる。またゲームコーナー、土産物の販売、喫茶店、高級料理屋などと共に野外でゲートボール、温水プールなど併設されそれぞれ趣向が凝らされている。

2：実態調査

基本属性を表1に示した。「居住地」ではAは名古屋市内が36.7%と最も多いが愛知県、岐阜県などもみられ、Bは名古屋市内居住者が受講対象者であるため97.8%占めている。愛知県が2.2%は入園後転居したものとみられる。「年齢別」ではAは70歳代が多く、Bは60歳代が多い。「性別」ではAは学生に特に祖父母のうち、どなたでも良しとしたため女性比率が高い。一方Bは“学ぶ”人々は男性の割合が多い。「家族形態」では拡大家族の直系がAは87.4%で、Bは34.4%と約2分の1である。一方核家族ではBはAの約8倍を占めており、都市居住者は核家族化の現れと推察される。「職業の有無およびその内容」では（職業とは定期的に肉体的、精神的にも労働を提供しているのをさす）Bの方はなしが多く81.2%を占めていた。

「年間平均収入額」はAよりBは2倍以上の2,780,288円である。Bは男性が大半を占め、Aは女性が多いためと推察される。

過去1年間に「温泉に行った割合」を図5で示した。温泉に行ったのは、Aは66.2%、Bは81.1%で半数以上の人温泉にでかけている。「温泉に行った回数」を図6で示した。Aは平均3.1回、Bは平均2.8回である。温泉地はA・B共に東海地方が最も多く、ついで東海・北陸、東海・関東の順であり、東北や北海道へ1年に1回出掛けている人達もある。

健康センターについてみると、「知名割合」を図7で示した。“知っている”はA・B共90%以上であった。各種の広告、会社の慰安会、会合で使用して友人や家庭で話題になり情報として知っており高い割合を示している。「入湯割合」を図8で示した。“有る”がA・B共平均45%で知名者の約2分の1が利用していた。「健康センターに行く主目的」を図9で示した。A・Bとも“温泉に入りたい”が最も多くAは42.0%、Bは48.1%、ついで“ゆっくり休みたい”がAは28.1%、Bは25.3%で以上2つで70%

表1 基本属性 単位：%，円

		A	B	
居住地	名古屋市	36.7	97.8	
	愛知県	26.9	2.2	
	岐阜県	21.0	-	
	その他	15.4	-	
年齢別	76歳以上	33.7	8.9	
	71歳以上	35.3	17.8	
	66歳以上	25.4	38.9	
	61歳以上	5.6	22.2	
	60歳以下	-	12.2	
性別	男	39.5	82.2	
	女	60.5	17.8	
家族形態	核家族	8.4	61.2	
	拡大家族	87.4	34.4	
	拡大家族(傍系)	4.2	-	
	独居	-	4.4	
職業の有無及びその内容	無	なし	69.0	81.2
	有	事務	1.4	3.3
		自営	22.6	8.9
		役員	2.8	3.3
		農業	4.2	-
		教師	-	2.2
		その他	-	1.1
年間収入(平均)		1,248,360	2,780,288	

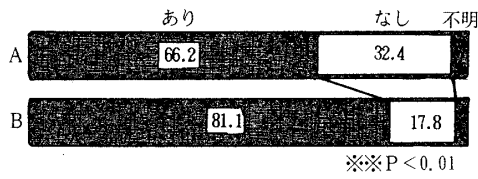


図5 温泉に行った有無 (一年間)

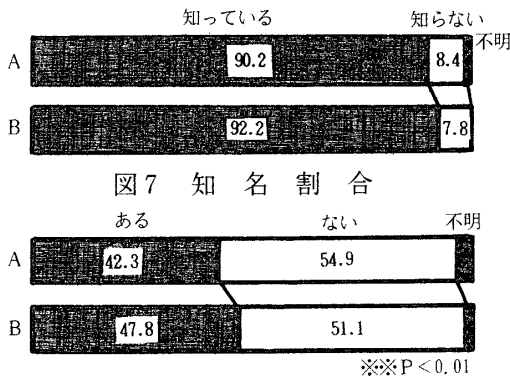


図7 知名割合

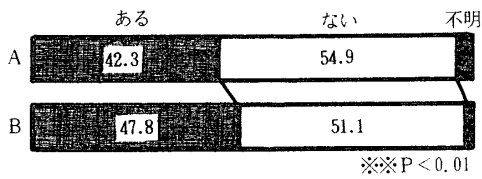


図8 入湯割合

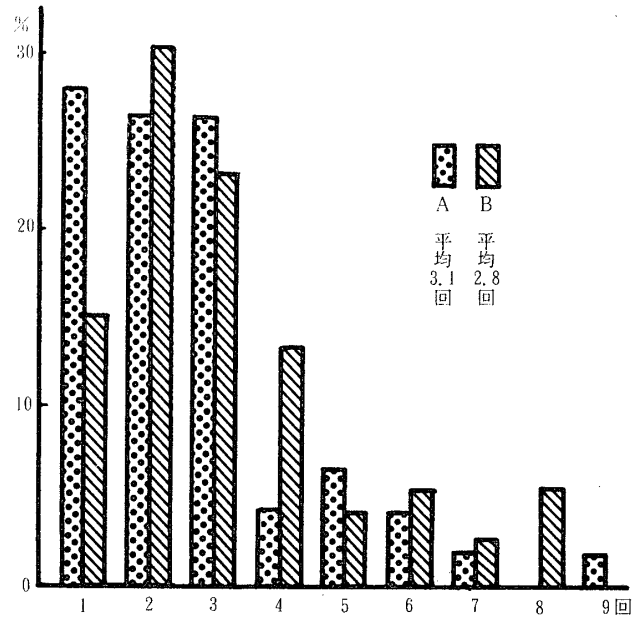


図6 温泉に行った回数

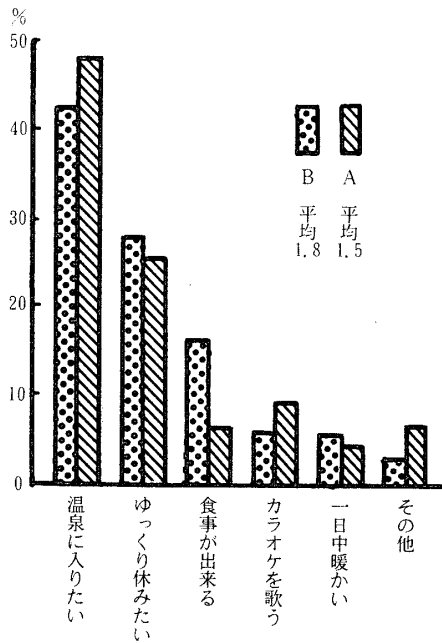


図9 健康センターに行く主目的

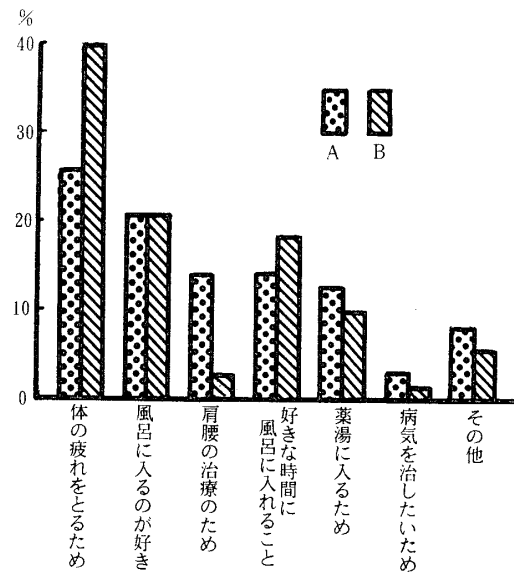


図10 入湯目的

以上を占めている。平均1人当たりAは1.8個、Bは1.5個の目的を持っていた。「入湯目的」を図10で示した。Aは“体の疲れをとるため”が26.8%と最も高く、ついで“風呂に入るのが好き”“好きな時間に風呂に入れる”などで、BではAと同傾向を示しているが、特に体の疲れをとるためが40.0%の高い割合を示した。「1日の入湯回数」を図11で示した。Aは2回と3回で84.8%を占め、Bは3回、2回の順で83.7%で平均回数はAは2.4回、Bは2.6回であった。健康センターでは仮眠室が有り、夏冬共空気調節がゆきとどいており毛布を1〜2枚掛ければ風邪を引くことはなく睡眠を取ることができるので、宿泊も可能である。

「宿泊の有無」について、図12に示した。Aは“あり”が81.8%と8割の人が宿泊経験を持っているが、Bは少なく13.3%が経験している。これは名古屋市内に住んでおり、直ぐ家に帰れること、配偶者がいる割合が高いことなどが推察される。「宿泊期間」を図13に示した。Aは2～3日が52.2%と最も多く、ついで1日、6日以上の順であった。Bは1日が66.6%と最も多く、長くても4～5日までであるが、これは1週間に2日位は学園に通うため、逗留することが不可能のことも原因の一つといえる。健康センターに誰と行くか「同行者の内訳」を図14に示した。Aは64.9%が友人と来ており、ついで配偶者である。Bでは友人が44.2%、配偶者が34.9%と高い割合を占めている。Aは女子同士で来ており、しかも配偶者が少ないことなどが友人の占める割合が多い結果と考えられる。「同行人数」を図15に示した。Aは8人以上で来ているのが最も多く22.5%を占めている。Bは2人が42.9%と最も多く、ついで3人であった。「1日の支出額」を図16に示した。Aは平均4,470円、Bは3,278円と約1,200円の開きがみられるのはAは1万円2万円の支出がみられ、全体に金額を押し上げている。「健康センターに来て楽しいか」評価した結果を図17に示した。“非常に楽しい”“やや楽しい”が各30%みられ、半分以上は楽しんでいる。Bでは“非常に楽しい”は11.5%とAの半分以下，“やや楽しい”は23.1%みられ、両者では三人に一人が楽しんでいる。また、“あまり楽しくない”“楽しくない”が7.7%見られる。

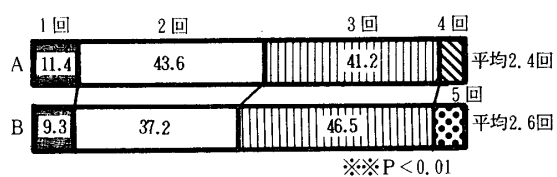


図11 一日の入湯回数

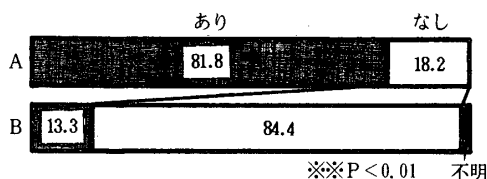


図12 宿泊の有無

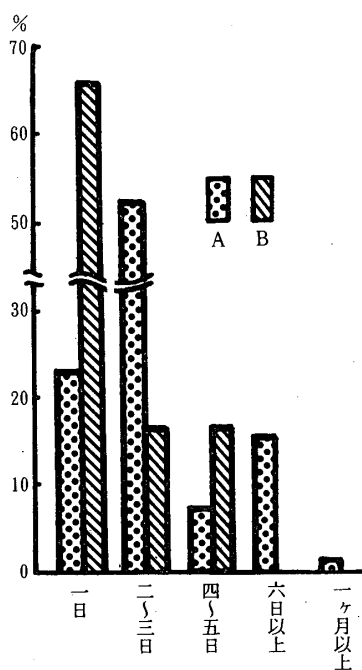


図13 宿泊期間

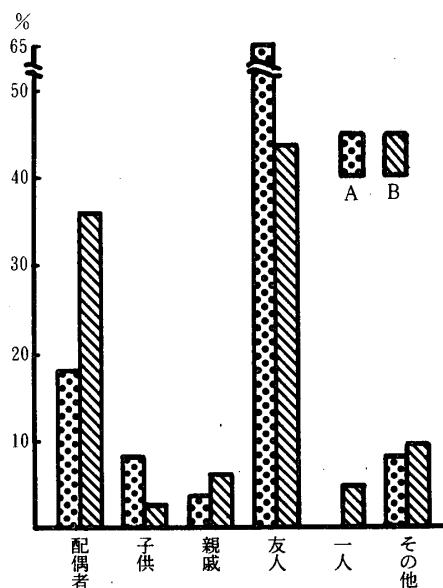


図14 同行者の内訳

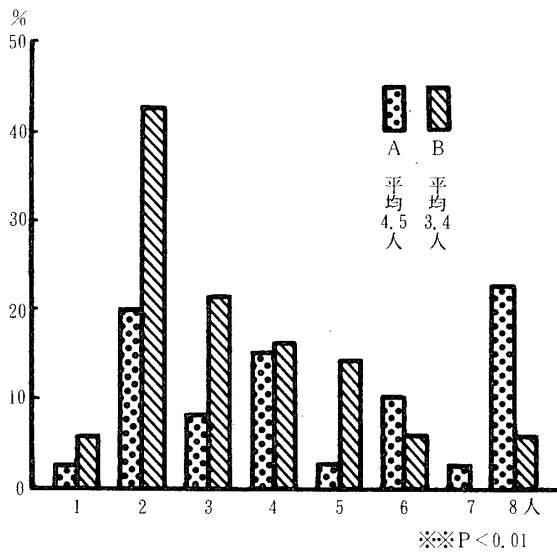


図15 同行人数

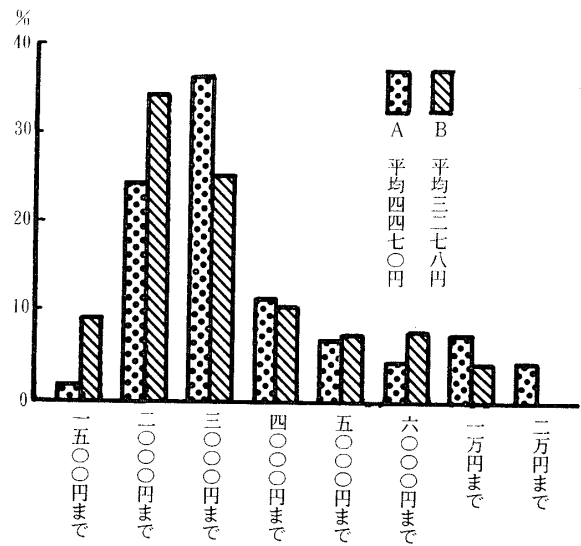


図16 一日の支出額

「連泊者の利用事例」を表2に示した。ア、イ、ウは愛知県内、エは四国、オは九州である。長期滞在者でもア、イのように通年で連泊している人から、ウのように冬季を中心に連泊する人、エのようにアパートに居るような感覚で利用する人、オのように2ヶ月に1回位の割合で入湯し、身体の疲れを癒しに来る人などある。

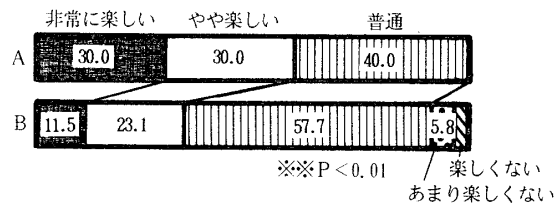


図17 健康センターの楽しさについて

各々家庭の事情や自身の健康のことを考えて、独居しているよりも、知らない人でも多くの人が居るところで、起居を共にすれば、何か問題があった場合助けて貰えるとの考えから利用している人達もあり（日帰りの人の中にも見られる）、自ら進んで来る人や家庭の事情で来た人など様々みられる。連泊者の実態は個々の事情の他に地域や季節により変動が見られ、その理由は①近くの人が日帰り、短期宿泊で来る人が多く、肉親を1ヶ月も連泊させたら、近所の人が良く言わないので、家族がそのような行動を高年者が取るのを好まない。②比較的冬暖かい地域のため独居でも寒さに耐えられる。③地域の連帯感があるなど推察される。

そこで「1ヶ月の経費」を上記資料をもとに試算した結果を表3に示した。入湯料+深夜料金+1日の食事代+その他副食費、被服費、衛生費など切り詰めて見積っても10万円は必要である。他にカラオケを楽しむとすれば、1曲200円を1日2曲歌っても6,000円は必要である。

以上の結果をもとに、連泊を可能にする条件として①風呂に入るのが好きである。②余暇の時間がまとまって取れる。③そこそこに健康である。④経済的にある程度豊である。⑤家に居るよりも何か魅力がある。⑥一泊の費用が安価である。⑦家庭で高齢者の役割が少ない。⑧家族が留守になるため、世話をする人がいない。⑨家事の手間が省ける、などの理由があげられる。

表2 連泊者の利用事例

		ア	イ	ウ	エ	オ
性別		女	女	女	女	女
生 年 歳		明 治 43 年 80歳	大 正 3 年 76歳	明 治 43 年 80歳	大 正 10 年 69歳	大 正 2 年 77歳
配偶者死亡年		昭 和 19 年	昭 和 39 年	昭 和 20 年	昭 和 50 年	昭 和 60 年
子 供 数		4人	5人	1人	3人	4人
収入の途		遺族年金 と 厚生年金	老 齢 年 金 と 子の仕送り金	会社に勤め定年 後バー経営時の 貯蓄と厚生年金	遺族年金 と パートの収入金	遺族年金 と 国民年金
自 宅 で の 状 況	住い方	息子の家族と同居	娘 と 同 居	アパート独居	アパート独居	息子の家族と同居
	食事準備	嫁	娘	自 己	自 己	嫁
	洗 濯	自 己	娘	自 己	自 己	自 己
	健 康	健 康	左半身軽いマヒ	健 康	健 康	やや心臓が悪い
	心配事の 有 無	無	考 え な い	体が動けなく なったら	考 え な い	無
友 人	カラオケの友人 自宅近くの人	自宅近くの人 宿泊している人	宿泊している人	職 場	自宅近くの人	
健康センターでの 一日の支出額	7,000円以上	3,500円位	3,500円位	3,000円位	3,000円 ~4,000円	
入 湯 回 数	早朝昼すぎ 2回	早朝午後就寝 3回	午後3時頃 1回	就寝前 1回	早朝午後就寝 3回	
そ の 他	自宅とセンターは 近い。カラオケで 歌うのが好き。 1987年4月より連 泊している。自宅 もカラオケ喫茶店 を経営。1980年頃 より日帰りの温泉 に連日通っていた。	娘が異常なほど清 潔好きで、家に居 られず、娘が此処 に連れてきた。 1985年により連 泊。1年間は毎日 泣いて暮らした。 現在はここで良い と思っている。	自宅と息子の家は 近い。寒い間は居 る。1986年1月~ 1988年3月まで。 1988年10月~1989 年2月まで。1990 年1月~3月位ま で連泊する予定。	夫の死亡後病院の 家政婦をしている。 自宅は不便な 処のため、此処に 泊まり病院に行っ ている。朝早く出 て19時頃帰って くる。 仕事のない時は自 宅に帰る。	家では孫の世話を しているので(子 は共働き)此処に は祭日、休みの時 に遊びに来る。 大体1~2泊して 帰る。年5~6回 姉妹・友人と誘い 合ってくる。	

表3 1ヶ月の経費

	試算
宿 泊	第1日目 1,800+600円=2,400円 2日目以降 (割引券を第1日目に貰う) 日曜日に招待券が出る (月4回とする) $2,400+2,400+(1,900\times 25) = 52,300$ 平均1日1,743円
食 事	1日平均 食事を2食とする …… $1,500\times 30 = 45,000$ 円 食事を3食とする …… $2,500\times 30 = 75,000$ 円
計	2食の場合 …… $52,300\times 45,000 = 97,300$ 円 3食の場合 …… $52,300\times 75,000 = 127,300$ 円
そ の 他	理美容代, 衛生費, 被服費など諸経費が必要である.

要 約

高齢者の健康センターにおける実態と意識を時間, 経済, 家族関係の面から分析を試みた.

1. 全国に風呂を中心にして24時間営業は47.8%を占め, 入湯料は最高2,200円, 最低は1,200円, 最多は1,800円で平均1,798円である. 更に深夜料金を追加すれば仮眠が可能で, 短期, 長期の連泊もできる.

2. 健康センターの知名割合は91%を占めているが, 入湯経験者は約2分の1である. また, 主目的は温泉に入りたい, ゆっくり休みたい, 食事が出来るなどがみられ, 風呂に入るのが好きな人達が利用している. 男性よりも女性の入湯割合が高い.

3. 1ヶ月健康センターで連泊すると, 入湯料, 深夜料金, 一日の食事代, その他副食費, 被服費, 衛生費など加算すると最低10万円は必要である.

今回は主として高年者の余暇について調査を行なったが, 午前10時に各地域から出ている無料送迎バスで高年者 (特に女性が多い) がグループで遊びに来て, 受付の開始を列を作っている, 午後3時~4時頃の送迎バスで帰っていくのが大多数である. 健康センター利用にも各種みられ, 午後7時頃からきてカラオケで歌い, 風呂にはいり, 食事をしていく人, 中年の主婦がグループで来て, 一日遊んで帰るというパターンが最近多く見られると北海道では報じている. また週末には健康センターによっては家族連れで泊まりを目的で来る人達も多く, 仮眠室だけでは休むことが出来ずそれぞれ空間を見つけて寝ている状態である. 従って午前1時, 2時の皆が睡眠中にも館内ではゲームをしたり, テレビを観たり, 遊び回っている子供がおり, 翌日の勉強に障害にならなければならないと思う. 現在少数の人々の行動であるが, 従来の家庭の姿とやや様相を異にしており, 高年者の問題だけでなく, 家族関係, 住生活, 生活時間など今後多くの課題が含まれている.

文 献

- 1) 日本電信電話株式会社: 全国各地域の職業別電話帳 (1985-1990)
- 2) 総理府編: 観光白書 総理府 112・278 (1989)
- 3) 全国高齢化社会研究協会: 高齢化社会年鑑 25-81 (1986-1987)
- 4) 総合ユニコム: 月刊レジャー産業資料 248号 138-142 (1988)